

# 絲綢之路

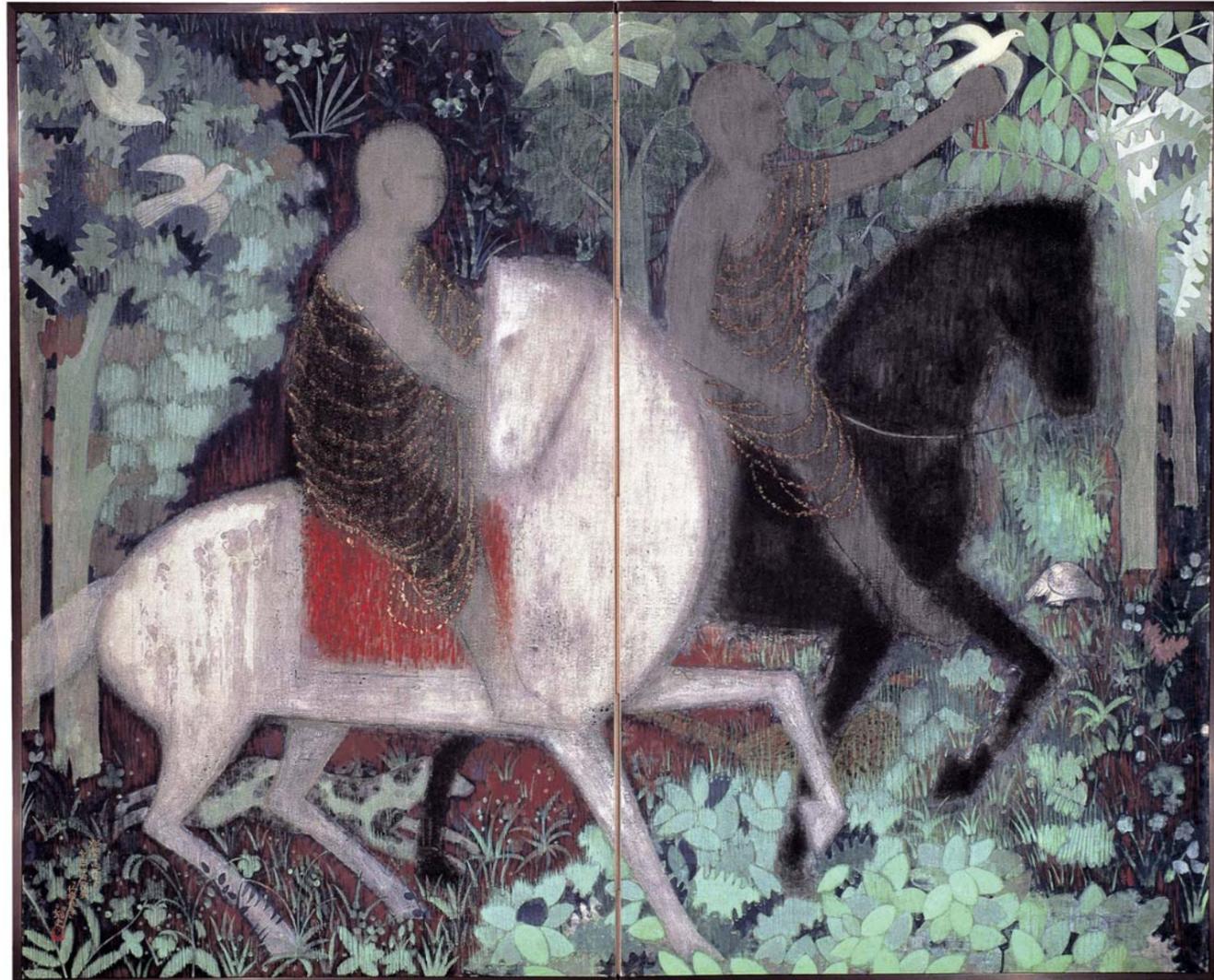
シルクロード

S I L K R O A D

2010-新春

No.62

●表紙の画および題字は、  
平山郁夫画伯のご厚意により  
ご提供いただいたものです。



仏教伝来 1959



#### 【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればとこの葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：  
東京芸術大学 吉田左源二名誉教授

## オアハカ歴史地区とモンテ・アルバンの古代遺跡 (メキシコ合衆国)



ユネスコ世界遺産(文化遺産)シリーズ ©UNESCO

オアハカは、メキシコの南部に位置し、十六世紀の初めに、スペインの植民地時代の都市計画を模範として碁盤目状に形成された歴史地区である。街の中には、教会や中央広場などコロニアル様式の美しい建造物が建ち並んでいる。また、古代遺跡のモンテ・アルバン(オアハカの西部約十キロに位置)は、オルメカ、サポテカ、ミシュテカの人びとが千五百年以上におたつて居住してきた場所であり、台地、ダム、運河、ピラミッドや古墳などで構成されており、特に先住民の文化を強く残している。

(一九八七年に文化遺産として登録)  
(社)日本ユネスコ協会連盟

## 新体制の始まりを前に

皆さま既に御存知の通り、平山郁夫理事長におかれましては、去る十二月二日、脳梗塞のため都内の病院で幽明界を異にされました。本来ならば、皆さまに新年を寿ぐ御挨拶を申しあげるべきですが、このたびは御遠慮させていただくことをお許し願いたいと思います。

\*

あの日、平山先生の訃報に接したときの驚きは今も私の脳裏に鮮明に残っておりま。私事になりますが、私が亡き平山先生に初めてお目にかかったのは、昭和四十二年と記憶しています。当時、私は法務省広報連絡室長の職にあり、旧制中学の同級生だった友人から俊秀の日本画家として平山先生を紹介されたのでした。爾来、四十年余、先生が心血をそそいで育てあげられた「文化財保護・芸術研究助成財団」のお手伝いをするに何かの御縁を感じます。そうした日々を回想していますと、思い出が次々と湧きあがり、慟哭を禁じえません。今は、ただ、ただ先生の御冥福をお祈りするばかりです。

現在、当財団は多くの問題に直面しています。一昨年の十二月に明治以来の大改革という民法改正により、新たな公益法人法が施行されました。私どもは法にのっとり

昨年八月に公益財団法人としての申請を内閣府に提出しております。当初は年内に認定されるものと目論んでおりましたが、様々な要素がからみあい、少しのびる見通しです。運営面においては、従来の業務に支障はありませんが、心理的には早く法に従い新組織に移行したい思いがございます。

昨年の総選挙において、政権交代が実現し、わが国の体制、組織もゆるやかではあります。変革しようとしております。しかし、この数年の世界経済における退潮ムードは一向に納まる気配はなく、日本経済の先行きもまだまだ大変厳しいものがあります。そうした傾向は、私どもの財団の運営においても大きな影を落としていることは否定できません。

当財団の運営は、文化による社会貢献、文化による世界平和の構築という平山イズムに賛同し、共鳴してくださる法人、団体、個人の皆さまの御支援によって成り立っています。こうした皆さまの御理解、御協力をさらに拡大してゆくことも私に課せられた任務であると自覚いたしております。亡き平山理事長は、かつて私にこうお話ししてくださったことがあります。

世の中を支配する力は、いろいろある。すなわち、政治力、軍事力、経済力……と



財団文化財保護・芸術研究助成財団  
顧問 俵谷 利幸

しかし、強大な影響力をもつ力の中にあつて文化力というものがあつてもいいのではないだろうか。私は文化力が一番平和な力だと思っています。この力を行使されて怒る人はいないと思います。私たちの財団は、そうした人々の力を世界に向けて発信する基地とならなければいけません。

このような先生のお考えが、敦煌で、アンコールワットで、高句麗古墳群で、それぞれ保存のための大きな力となったことは周知の通りであります。

月並みな言葉ではございますが、時代は日進月歩、情報化社会における世の中の流れは早く、うっかりすると取り残されて、流れの中で孤立してしまいます。それは許されぬことです。

\*

私自身を含めて、当財団は自分たちの歩むべき目標をしっかりと定めて進んでゆきたいと存じます。

平山郁夫先生という大きな支えを失ってしまったことは誠に痛恨の極みですが、先生から賜りましたこれまでの御教訓を糧に悲しみを乗り越えて、先生の理念にそうべく、文化財の保護と芸術文化の発展のために一層の努力をすることを皆さまにお誓いいたしたいと思います。

# 天平建築の修理と復元

よみがえるわが国初の本格的都市・平城京の偉容を見る

## 平城京遷都千三百年の 記念の年に

今年遷都千三百年の記念すべき年を迎えた奈良では、平城京に営まれた大寺院や宮殿跡に、天平建築の修理や復元が相次ぎ、一寸した古代建築ブームになっている。すなわち修理では国宝唐招提寺金堂が昨年十一月に竣工したのに続いて国宝薬師寺東塔が着工された



現存する天平時代の唯一の金堂として知られる唐招提寺金堂

ところであり、国宝正倉院正倉は修理前の調査を行って準備中である。また復元では平城宮第一次大極殿正殿がほぼ完成し、興福寺中金堂は基礎の整備を終わって本年は立柱式を迎える。

ここにあげた建物はいずれも規模が大きく奈良時代を代表する第一級の建築ばかりで、今までこれだけ多くの建物の修理や復元が集中的に行われたことはなかった。奈良では薬師寺の伽藍復興が三十数年前から「国土莊厳」をスローガンに進められている。興福寺の今回の合言葉は「天平の文化空間の再構成」である。残された建物が限られている中で、復元によって古代空間が実感できる場を再現することも文化財保護の一分野である。今、奈良はかつての「青丹よし奈良の都」とうたわれた姿を少しづつ取り戻しつつあると云っても差し支えない。その近況を以下お伝えしよう。

## 平成の大修理成る

まず唐招提寺金堂は現存する天平時代の唯一の金堂で、その屋根には当初の鴟尾が残り「天平の甍」と呼ばれるのでよく知られている。一九九八年から二年間調査工事を行った

と思われる。年輪年代調査もそうした科学的手法の一つで、金堂の場合は垂木が七八一年に伐採された木を使っていることが判明し、建築年代を知ることができた。従来金堂の年代にはいろいろな説があったが、これで決着したと云ってよい。その他にも正面の扉の彩色文様など創建当初の形状が判る貴重な発見が各種あったが、修理自体は建物の今までの歴史を尊重して部材も可能な限り再利用し、補強も屋根裏で行ったために、竣工した姿は修理前と全く変わっていない。但し鴟尾は痛みが激しいため取替えた。

## 天平への回帰

次にこれから解体修理を行うのが薬師寺東塔で、現在は調査用の足場でスッポリと覆われている。四月には一旦足場を外し、本年中は旧来通りその美しい姿が見られるが、その後には本格的な素屋根を建設して約八年間はそ



解体修理を行う薬師寺東塔

の中で工事が行われる予定である。修理が必要となった最大の理由は心柱の下方が腐って大きな空洞を生じたことで、そのために心柱



復元された平城宮跡、第一次大極殿正殿

堂の第一号の建築である。興福寺は一七二七年の火災で伽藍が焼失したあと永く中心部分が欠けた寂しい姿であったが、創建千三百年に当たる今年、約三百年ぶりに中金堂を立柱・再建する。興福寺は度々の火災に逢い乍らその都度創建当初の伽藍を復興してきたが、今回も創建時の規模・構造の完全復元で、正に「天平回帰」をめざしているのである。

天平建築の修理や復元が間近に見られる機会はいく限られている。修理では新発見や古代技術の解明が期待されるし、復元では現代の工匠たちが伝統に挑む姿に接することができる。奈良では天平文化が今も大きく息吹いているのである。



鈴木嘉吉

(すずき かきち)

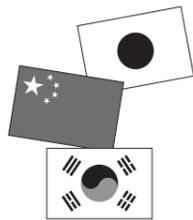
profile

1928年東京都生まれ。日本建築史専攻。元奈良国立文化財研究所長

# 第五回 「日中韓文化交流」

## フォーラムに参加して

共通の文化基盤を持つ東アジアの三カ国の文化交流の力は、政治や経済の壁を乗り越え、各国民の相互理解を推進する



第5回日中韓文化交流フォーラム会議の様子

### 日韓ゆかりの地へ

日本・中国・韓国という共通の文化的背景を持つ東アジアの三カ国で、文化交流を通じて相互理解を深め、友好関係をいっそう発展させようという「第五回日中韓文化交流フォーラム」に参加するため、平成二十一年十二月十四日〜十七日に中国・揚州市を訪問しました。今回、当地でフォーラムが行われたのは、鑑真和尚が大明寺の住職をされていたというご縁、唐の時代に揚州で官職を務め、中国文化を自国にもたらした韓国人なら誰でも知っている崔致遠という人とのご縁からです。三カ国の文化交流にはうってつけの地でした。今回は平和と仏教の進むべき道を探る「仏教フォーラム」と、それから「筆会」と呼ばれる中国では一般的な、即興での書や墨絵等の制作会が全体会議に合わせて行われました。全体会議には、国際交流基金から二名（松尾修吾理事、大海渡憲夫参与）、当財団から二名（玉井賢二顧問、私）。また、「仏教フォーラム」へは、唐招提寺の西山明彦執事、法隆寺の大野正法執事、奈良西ノ京・薬師寺の松久保伽秀執事のご参加をいただきました。「筆会」へは、漆芸作家で東京藝術大学教授の三田村有純先生、陶芸作家で文星芸術大学講師の佐伯守美先生、書道家で宇都宮大学准教授の中島宗晴先生にご参集を仰

### フォーラム全体会議 「青少年交流の強化」を提言

正義揚州市長から、中華料理としてはあっさり味の揚州料理で歓待を受けました。翌日はよいよ本番。午前九時に開会式が行われた後、場所を移動して、午前十時半から大明寺に千人余りが集まり、平和を祈る「大祈禱法会」が行われました。終了後は、西山、大野、松久保の各師は、沢山の信者に囲まれて大人気。昼食の会場まで時間間に合うように連れ出すまで一苦勞でした。午後にはフォーラム全体会議。この四年間の成果である日中韓友好姉妹都市大会、日中韓サッカーU21大会等の三カ国の交流実績が報告されました。奇しくも、直前に、北京で日中韓首脳会談が行われ「東アジア共同体」構想が論じられた後だけに、まずは「文化の共同体」を築くことが第一歩であるとの発言に参



千人が参集した大祈禱法会

### 仏教フォーラム筆会も盛況

加者は共感を表していました。同時に、中国側の努力に対する讃辞が異口同音に発せられたのが印象的でした。次回、日本での開催方針が伝えられ、最後に、中国文化部元副部長でこのたびのフォーラムの議長を務めた劉徳有氏が「未来を担う青少年の交流を使命とし、これをいっそう強化したい」と宣言されました。

一方、同じ時刻に「仏教フォーラム」が行われており、西山・大野・松久保の各師に参加頂きました。揚州市副市長・同市宗教文化局の方たちの祝辞に続いて大明寺住職・能修法師が挨拶。宗教や文化が平和共存のためにどのように役割を果たすべきか意見が交わされ、日中間では鑑真和尚、韓中間では崔致遠が果たした役割を再評価し、顕彰に勤めることが重要との話し合いが行われました。日本を代表して西山師は日本仏教も近代に至るまで、釈迦牟尼への原点回帰を重ねる傾向にあるが、「戒律」という仏の教えを基に、中・韓・日の仏教界は共通の見解をまとめ、三カ国の仏教界が協調して仏法の興隆を図るべしとの意見を述べられました。そして最後に、世界平和と仏法興隆を骨子とする「揚州宣言」に、全員が署名をして終了。夕方からは、「日中韓友好コンサート」が、多くの若者で埋まる揚州市体育センターで開かれました。歌あり、踊りあり、中国得意の雑技ありで盛りだくさんの内容はテレビでも中継され、後にニュースとしても報道されたとのことで、日中韓友好イベントとして大いに役立つこととなりました。翌十六日は、「筆会」。会場は大明寺・鑑真書画院。主催者および各国代表者が挨拶されましたが、我が日本の三田村先生は、中国語、韓国語と日本語の三カ国語で挨拶をされ大喝采。冒頭で大いに盛り上げていただきました。十一時半まで各国の代表作家は自分のスタイルで制作を行い、見学者は筆を扱う芸術表現を十分に堪能。同じ素材、技法でも、表現は幅広く、個性的な作品群が完成しました。それらの



村木 茂 (むらき しげお)  
勸文化財保護・芸術研究助成財団  
事務局次長

きました。この十名で、上海に向けて出発。上海で中日友好協会の方々の出迎えを受け、揚州まで高速道路をひた走り、途中休憩をはさみながら、四時間以上かけて到着しました。また、北京からは山田重夫公使と国際交流基金の藤田安彦主任、上海からは石井哲也首席領事たちも駆けつけてくださいました。韓国の皆さんも、南京から同日到着。この日は、謝



日中韓3カ国語で流暢にスピーチする 芸大:三田村 有純 先生

### 今年は日本開催

作品は、そのまま鑑真書画院に寄贈、收藏され三カ国の友好の証しが、中国の地に永く保存されることになりました。これで、僧侶の皆様と芸術家の先生方の大役は終了。午後は、市内の名所を視察。そして最後の正式行事は、大明寺コンサート・ホールでの「仏教梵唄チャリティー・コンサート」。日本から特別参加の華道の方々もステージで活躍され、終わりに我々はゲストとして壇上上げられ記念撮影でお開きとなりました。

昨年二月末に揚州市で事前打合せをしてから八カ月、以降、様々なやりとりがあり、また、現地へ着くまでは不明な点も多々あり、不安でいっぱいでしたので無事終わったことに大変ほっといたしました。「さあ、今年は日本開催」昨年の中国の力の入れようは予想以上でしたので、予算の乏しい民間団体が国際交流イベントを実施するのは大変です。幸いなことに故・平山理事長の尽力により実現したこの「日中韓文化交流フォーラム」は、国際交流基金が率先して取り組んでいる事業でもあります。現在、「東アジア共同体」構想が三カ国で取り上げられ、さらに推進されようとしておりますが、このフォーラムはその「文化」版とも言えるもので、これを成功させることが、政治・経済レベルでの三カ国共同体実現への礎になるに違いありません。そのような高い志で、本年の、「日中韓文化交流フォーラム」を成功させたいと思っております。

### 鑑真 かんじん (六八七年〜七六三年)

唐の学僧。揚州江陽県の生まれ。日本における律宗の開祖。日本への渡航失敗五回。暴風、失明などの苦難を乗り越え七五三年(天宝勝宝五)来日。東大寺に初めて戒壇を設け、聖武上皇以下に授戒、後に唐招提寺を賜った。

# ルーマニアの建築遺産

——トランシルヴァニア、モルドヴァ地方の視察から——

## ルーマニアとは

二〇〇九年五月にルーマニアの西部トランシルヴァニア地方でICOMOSの民家学術委員会(CIAV)がマハット氏の企画で行われた。

彼はトランシルヴァニア地方出身のドイツ系住民で、ルーマニアが共産化した時にドイツに移住し、共産政権崩壊後ルーマニアの歴史的集落の調査と保存に尽くした方である。

次いで十一月にはルーマニア北東部のモルドヴァ地方でルーマニア正教会修道院の壁画修復の日本・ルーマニアの研究會があった。この企画は、これらの修道院で五年間修復に当たっていた館崎麻衣子女士とブカレスト芸術大学ボルドゥーラ教授によるものである。この二回の會合は内容が異なるのだが、ルーマニア文化の多様さを知る良い機会であった。

ルーマニアとは「ローマ人の国」の意味だそうだが、一〇六六年にローマ帝国がこの地を支配していたダキア人と戦い、ローマ帝国の属領となったことからローマ人が入植し、この地を「ルーマニア」と呼ばれるようになった。二七一年ローマ帝国がこの地を放棄し、その後西ゴート族、フン族、ブルガール、タタール、

ロシア、オスマン・トルコ、ハンガリー、ドイツなどの支配を受けた。一九一八年になってトランシルヴァニア、モルドヴァ、ムーテニアとワラキア四州のルーマニアの国家統一が出来た。なぜこも周



トランシルヴァニア地方のアルバルイアの金鉱の入り口。ローマ時代から2004年までの間に300tの金を採掘していた。

辺国から狙われるのだろうか。それは、ルーマニアの地下資源も一因ではないだろうか。トランシルヴァニアのアルバルイアにある金鉱遺跡の管理人の説明によると、「金はローマ時代に掘り出され二〇〇四年までの一六〇〇余年の間に三〇〇屯の金を採掘し、ヨーロッパの経済を潤わせた」とのこと。この他銀鉱もあり二〇〇屯を採掘していたという。金鉱は深く二〇〇段ほどの階段があった。このような魅力ある資源があれば周辺諸国はほっとく訳は無いだらう。

ルーマニアの民家建築は現在まであまり知られてなく、今回の會議でその特徴や被入植時代の影響などが知らされた。特にトランシルヴァニア地方はドイツの支配が長く、建築や住民の習慣にその影響があると云う。言語もルーマニア語が標準語のようにだが、ハンガリー語も公的に使用されており、そればかりではなく、ルーマニア語の中にイリア語はかなり入っているようだが、ロシア語的、トルコ



前野まさる  
Masaru Maeno

語的単語も聞かれた。民謡、ダンスなどにもスラブ的、カザック的音楽、振り付けが見られ、文化の多様性や歴史の重層性を感じられた。

## トランシルヴァニアの建築

ルーマニア北西部トランシルヴァニア地方には長い歴史の中で住民の周辺国家の侵略から自らを守り築いてきた歴史



トランシルヴァニア地方で良く見かける民家の屋根裏の窓、まるで人の目のようだ。

が、民家、教会、城跡、金鉱跡などの歴史的遺産の中に伝えられ、それら遺跡からルーマニアの歴史の複雑さと特徴が読みとれる。

トランシルヴァニアの民家は共通して六〇度ほどの急勾配の屋根だが、ドイツ系の民家は切り妻屋根が多く、ハンガリー系のは切妻の棟を兜屋根にしたものが大勢を占めている。また、屋根の下り面にある屋根裏の小窓はむくり屋根に小窓があり何か人の目のようにチョット気を引かれる。北東部のモルドヴァ地方にも屋根裏窓はあるが目のような形の窓は見当たらなかった。

ルーマニアの教会建築は正教会系が九〇%を占めているようだが、その他ローマンカトリック、プロテスタント教会などがそれぞれの町にあり、きちんと管理されている様子から信心の深さを感じる。

また、城郭のある町がある。この城郭は一般的な城郭ではなく、外敵が攻めて来た時の住民の避難所として設けられたもので、教会と食料庫を中心に周辺に広場と住居を設け、住民の避難所としたものである。特に一四世紀から一七世紀にかけてオスマン・トルコの侵略が繰り返され、六〇〇カ所程の城郭教会が建てられたという。現在では三〇〇カ所程が残されているという。CIAV会員が訪れたカルニック城郭教会は中央に食料庫・酒造庫と住居の塔が建ち、教会は城門脇に建てられていた。教会の様子はパロック的だがパイオルガンを備えた立派な教会で、現在は教会行事は勿論、住民のための音楽会、演劇、美術展示や講演會に活用されている。一九九三年にトラン

シルヴァニア地方で七カ所の城郭教会が世界遺産として登録されている。



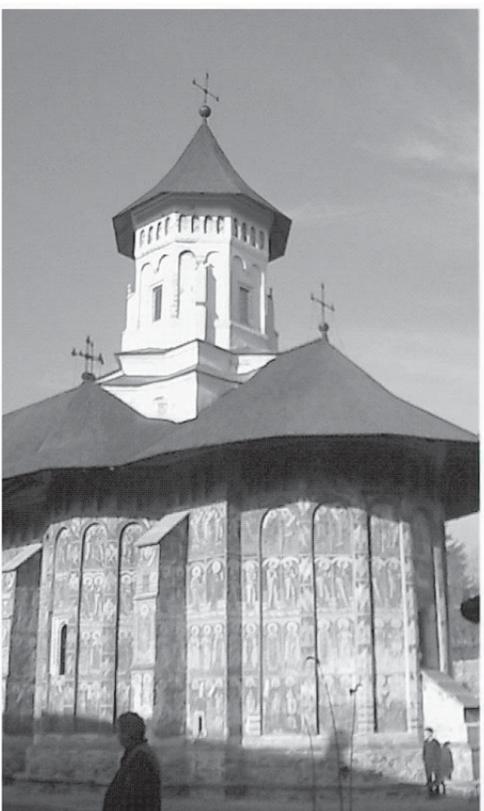
トランシルヴァニア地方のカルニック城郭 1269年築。右に穀倉のある塔の入り口が見える。

## モルドヴァ地方の修道院

侵略を繰り返されていたルーマニアの歴史の中で独立を果たした国家があった。一つは南東部のワラキア公国と北東部のモルドヴァ公国である。このモルドヴァ公国に偉大な指導者として君臨し、オスマン・トルコの支配から国を守り抜いたのが、シウテファン大公(在位一四五七〜一五〇四)である。篤い信仰心の持ち主で、大公は戦いで勝利するたびに修道院や教会を建造していったといわれている。今回訪れた九カ所の修道院は全て一五〜一六世紀に集中している。

モルドヴァ地方の修道院聖堂は、壁画を内壁は勿論外壁まで描くもので、一目立つ独特な聖堂であった。このように壁画が壁一面に描かれているのも他の教会建築に見られない特徴と思われる。外壁の壁画は軒下に続く連続リブアーチ壁に描かれ、壁画の内容はキリストの家系図から始まり聖人伝が描かれている。西壁には最後の審判をテーマに、善人と悪人が如何に裁かれるのかを表している。また、聖堂の寄贈者とその家族が神に聖堂を寄贈している絵が描かれているのも通常の聖堂とは異なる。

教会の平面は祭壇を東に置き、ネイブ、ナルテックスの位置関係は西ヨーロッパの教会と同様であるが、アイルを持たずネイブのみの単身廊であるところは他地方の教会とは異なっている。また、祭壇と脇祭壇を半円形に外部に張り出し、柿葺の木造屋根もこの平面に沿って深く張り出していることなどモルドヴァ地方の修道院の特色と思われる。また、修道院



モルドヴァ地方のモルドヴィツァ修道院聖堂 1486年築。外壁全体に壁画が描かれている。木造の屋根は柿葺き。

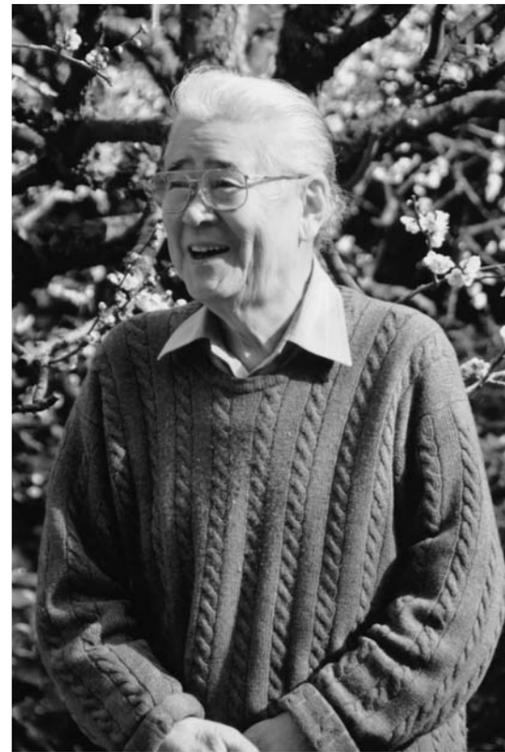
### 筆者略歴

一九三二年中国長春生まれ、日本建築史・市民運動、前・日本イコモス国内委員会委員長

の周辺には高さ約一〇mの丈夫な城壁が築かれている。モルドヴァはトランシルヴァニアのようなオスマン・トルコの侵略はなかったが防護のために築いたものであろう。これらの修道院群は一九九三年に世界遺産に登録された。

今回のルーマニア研究視察から、このように、トランシルヴァニア、モルドヴァ共に古代から周辺諸国の侵略を受け、住民が自らを守るためになをしたか。植民してきた住民もルーマニアの土地で何を、何を伝え残して来たのか。城壁避難所の教会と穀物蔵は、災害時に「心と糧」の重要さを教えられる。ここからさらに多くのことを学べるものと思う。

# 平山郁夫理事長を悼んで



2008年2月、鎌倉。アトリエの庭の梅の木の前で……。

平山郁夫理事長におかれましては、去る十二月二日、十二時三十八分、入院先の都内の病院で脳梗塞により逝去されました。行年七十九歳でした。

平山先生は昨年六月頃から体調を崩され、入院を繰り返しておられましたが、創作意欲は決して衰えることはありませんでした。

自身の個展のことや独自の絵画論などを担当のお医者さまや看護士さんを相手に熱く語るなど、絵に対する情熱は最後まで失うことはありませんでした。

平山先生という大黒柱を失った当財団といたしましては、その痛みは計り知れないものがあります。しかし、そうした悲しみを乗り越えて前に進んで行くことが、残された私たち職員に課せられた使命と考えます。

平山先生の卓越した指導力のもとで発足した当財団ですが、産声をあげたばかりの御支援と御協力のもとに国内外の貴重な文化遺産保護の面でも、またわが国の芸術文化の発展の面でもいささかでもお役に立てたかと、自負しております。しかし、ここ数年の世界的な経済状況の悪化は当財団の運営面においても影を投げかけていることは事実です。

文化による社会貢献、文化による世界平和の構築、平山先生のかかげられた理想のたいまつのお誓いし、あわせて皆さまと共に御冥福をお祈りいたしますと存じます。

入院中も新しい構想を思いつかれると、即座にそれを画用紙に描いたり、ある時はお気に入りの花を病室に持ってこさせ、これを和紙に描き、彩色をほどこすなど、その姿勢は健康であられた時と全く変わりはありませんでした。また気分がよい時は、制作中の平城京遷都一三〇〇年を記念する大作や、この八月にトルコのイスタンブールで開かれる御

から二十二年の歳月が過ぎました。この間、多くの皆さまの御支援と御協力のもとに国内外の貴重な文化遺産保護の面でも、またわが国の芸術文化の発展の面でもいささかでもお役に立てたかと、自負しております。しかし、ここ数年の世界的な経済状況の悪化は当財団の運営面においても影を投げかけていることは事実です。

こうした瞬間においても、多くの傷ついた文化財は救いの手を待っています。平山先生は、敵味方の区別なく、戦場で傷を負った兵士を救うべく組織として国際赤十字を創立したアンリ・デュナンに倣って「文化財赤十字構想」を提唱、さらにこれを発展させた「文化財赤十字病院構想」に取り組んでおられました。

この壮大な構想を具現化するには官民一体となった力で推し進めることが肝要である、と先生は主張されていきました。一方で、膨大な費用を要することも明白です。前述の如く昨今の不況下においては官民共にこうした分野の予算を捻出することは大変むずかしくなっています。

この問題は平山先生から課せられた宿題です。私たちは一日でも早く答えを出し、先生の御心に応えたいと思います。

今、平山先生は天国において病苦から解放され、思う存分に絵筆をふるわれていることでしょう。

文化による社会貢献、文化による世界平和の構築、平山先生のかかげられた理想のたいまつのお誓いし、あわせて皆さまと共に御冥福をお祈りいたしますと存じます。

次回、夏号において平山郁夫先生追悼の特集を掲載いたします。

(専務理事 小宮 浩)

## 故平山郁夫先生「お別れの会」

昨年十二月二日に逝去された平山理事長の「お別れの会」が二月二日、ザ・プリンス パークタワー東京で行われました。式典には三笠宮崇仁殿下のご臨席を賜り、二七〇〇人以上の人々が献花してお別れをしました。



○賛助会員ご入会並びにご寄付のお願い  
当財団では、財団の活動趣旨にご賛同いただき、ご支援いただける賛助会員の法人、個人の方々を募集しています。

法人正会員	年額(一口)	50万円
個人正会員	年額(一口)	1万円
維持会員	年額(一口)	10万円

財団案内および賛助会員入会申込書のご請求、その他お問い合わせは財団事務局にご連絡下さい。

○アフガニスタン文化財復興支援基金と流出文化財(文化財難民)一時保護  
当財団は、アフガニスタンの文化財復興を支援するために募金を行っております。募金は郵便振替(00160-5-12319 財団文化財保護・芸術研究助成財団)並びに財団宛の現金書留で受付けております。郵便振替と現金書留には「アフガン募金」と記載してください。お問い合わせは、財団事務局まで。

なお、当財団は特定公益増進法人の認定を受けており、五千円以上のご寄付並びに賛助会費は税法上の優遇措置の対象となります。

皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

○アフガニスタン流出文化財の保護  
昨年六月、都内在住の方が保護しているカブール博物館旧蔵の「貼り付け装飾ガラス壺」が流出文化財保護日本委員会に寄附されました。カサビ地方ベグラーム出土の一世紀頃のものと思われま

## お願い

## 岡田健氏が「三秦友好奨」を受章

陝西省の唐代陵墓石彫像の修復事業に大きな業績を残した東京文化財研究所の岡田健氏に対して、中国陝西省人民政府より「三秦友好奨」が贈呈されました。

岡田氏は、日本側の責任者として五年間にわたるこのプロジェクトを推進して大きな成果を上げ、日中の石造文化財の修復技術の研究開発に貢献されました。このプロジェクトは、篤志家黒田哲也氏が資金を提供して、当財団と陝西省文物局が合意書を取り交わし、日中共同で西安郊外にある唐時代の陵墓石彫像を修復整備したものです。



## 今月の表紙

名作「仏教伝来」の誕生から五十年。日本画壇に新風を吹きこまれた平山郁夫先生が昨年十二月二日身罷られました。本号では亡き先生を偲び、平山芸術の原点である「仏教伝来」を掲載いたしました。先生は玄奘三蔵の人生に常に御自身の人生を重ねておられたように思います。

艱難辛苦を乗り越えれば必ずや大いなる喜びに出会える、努力する大切さをこの作品は教えてくれます。平山先生に感謝を申しあげ、御冥福をお祈りいたします。



## 編集後記

皆さま新年を無事寿かれたことと拝察いたします。御承知の通り、去る十二月二日に当財団の平山郁夫理事長が逝去されました。法の定める規則に従い、新理事長の選出、また関係省庁等への諸手続きで新春号を例年より一月延期させていただきました。亡き平山先生との「お別れの会」の様子は本欄で速報としてご紹介させていただきました。

シルクロードの地を歩くこと百三十回余。これほどシルクロードを歩き、シルクロードを描いた画家は歴史上、平山先生のみでしょう。本財団誕生もシルクロードの要衝であった敦煌の莫高窟遺跡の保存問題がきっかけでした。次号夏号では「お別れの会」の詳細を中心に平山先生追悼の特集をお送りいたします。皆さまの心に残る新たな平山先生の像が生まれてくるのではないのでしょうか。

平成十七年より始めました「シルクロード文化財保護プロジェクト支援基金」は、本年で終了いたします。平山先生の作品で奈良からローマまでたどる旅を中心にこの活動の成果が二冊の書としてまとめられ、この秋に出版される予定です。詳細は次号でご紹介いたしますが、このプロジェクトも日・中・韓にまたがる国際文化活動の環であり、今後ますますこうした協力体制の伸長に繋がるものと思っております。

多くの問題を抱えている私たち「地球家族」ですが、国境を越え、民族を超え、宗教を越え、立ち塞がる様々な壁を乗り越え、お互いに協力しあい、本年が幸多い、充実した良き年になることを祈念いたしますと存じます。

## お知らせ

「在外日本古美術品保存修復センター基金」は二千八百三十五名の皆さまから三千五百十二部の応募を頂きました。皆様の温かいご支援、ご協力ありがとうございました。



頃のものと思われま